

第19回横浜市地域まちづくり推進委員会表彰部会会議録	
日 時	令和5年8月17日（木）14時00分から16時00分まで
開催場所	市庁舎27階S03共用会議室（オンライン）
出席者	【委員】（オンライン参加）片岡委員、加藤委員、高村委員、田邊委員、室田委員 【事務局】榊原部長、村瀬担当課長、大嶽担当係長
欠席者	なし
開催形態	公開（傍聴0人）
議 事	1 部会長等の選出について 2 横浜・人・まち・デザイン賞の概要について 3 第11回横浜・人・まち・デザイン賞の進め方について 4 第11回横浜・人・まち・デザイン賞の応募状況 5 その他
決定事項	部会長：室田委員、職務代理者：田邊委員 委員同士でメールアドレスの共有、デザイン賞の書類様式の一部修正
<p><b>【議事1】部会長等の選出について</b></p> <p>●部会長の選出 （事務局） 部会長は、委員及び専門委員の互選により定めることとされていることから、どなたか会長への推薦をいただきたい。（横浜市地域まちづくり推進条例第23条第3項） （片岡委員） まちづくりやコミュニティに造詣が深く、前期の部会長のご経験もあることから、室田委員を推薦する。 （全委員） 同意。</p> <p>●職務代理者の指名 （事務局） 職務代理者は、部会長の指名となっている。室田部会長から指名をいただきたい。（横浜市地域まちづくり推進委員会表彰部会要綱第4条第3項） （室田部会長） まちづくりコーディネーターとしてのご活躍、長きに渡る部会委員のご経験から、田邊委員を推薦する。 （全員） 同意。 （室田部会長） これまでの会議から、市民の方が大変活発に活動されていることがわかる。その分本部会がもつ役割は大変重要であると思っている。</p> <p><b>【議事2】横浜・人・まち・デザイン賞の概要について</b> （事務局） 横浜・人・まち・デザイン賞（以下、デザイン賞という）の概要（資料2参照）を説明。 （全委員） 質問等なし。</p> <p><b>【議事3】第11回横浜・人・まち・デザイン賞の進め方について</b> （事務局） 第11回横浜・人・まち・デザイン賞の進め方（資料3～5参照）を説明。 （片岡委員） 評価項目について、前回の部会で各項目を見直したが、なぜ今回変更されて、各項目にどのような意味があるのか。新たな委員のメンバーでその認識を共有する機会はあるか。改めて事務局等から説明してい</p>	

ただけるか。

(事務局)

前回の部会で「公共性」や「積極性」など単語のみだと、具体性がなく評価することが難しいといったご指摘をいただいた。それを踏まえて、委員の皆様へ評価しやすい基準について意見交換させていただき、今回の基準となっている。

(田邊委員)

今回変更した基準の説明の補足だが、地域まちづくり部門は、幅広い活動が推薦されるので、旧選考基準では審査が難しかった。各委員が自問自答しながら評価していた。

以前は、地域活動の延長のまちづくりが一般的であったかと思うが、昨今は決まった志を持ってテーマ型で周囲の方を巻き込みながら、社会を変えようと活動される方がいる。また、地元企業が社会貢献として活動したり社会実験の形式をとりながら市民の方を支援して進めたりすることもある。様々な取組がある中で、どのような活動背景でも評価できるように、各基準の意味の幅を広げながら踏み込んで評価できるようにした。

本表彰事業では、活動の実績年数が数年～数十年までの団体が同時に推薦されてくる。継続してきた実績の重さもあれば、これから先の可能性を秘めた活動もあり、それらもしっかりと評価できるようにした。

(片岡委員)

改正した選考基準は、以前よりも意味が明確にした。しかし、実際に点数をつけて審査する際に、例えば1～2点の点数差にはどのような意味があるか、各委員で異なると思う。選考基準に沿って評価するが、その採点のつけ方は各委員の独自の考え方をもって行うことになる。違った考え方をもって採点することは良いことだと思うが、その採点の考え方を情報交換する機会があると、お互いに参考になるのではないか。そのようなディスカッションをできる場があるとよい。

また、二次選考まで残る推薦団体は、おそらく満点に近い点数の団体になるかと思う。しかし、1点集中型の活動だが、とても良い味のある活動もあり、それらが選考に残らないことは寂しい。そのようなことも考え、一次選考で採点の軸を決めつつ悩みながら審査をやらざるを得ない。

(高村委員)

説明いただいた補足も含めて、確かに旧選考基準はあまり具体的ではなく、役所的な堅い文言になっている。新しい基準では少し具体的になって補足の説明もいただき、イメージがしやすくなった。しかし1点不安な項目があり、基準に「③熱意を持って主体的に取り組まれている活動」とあるが、実際に活動に参加しないと分からないと思う。書類からどのように審査委員に伝わるのか。

審査の際に、意見交換や補足説明できる場があるととても助かる。採点方法で、採点の点数制限はあるのか、のちほど一次選考の審査書類で説明があるかと思うが、応募団体数が多いと採点したときに各団体の点数差がおそらく僅差になってしまうかと思われる。

(加藤委員)

選考基準が明快にはなっているが、各項目の言葉の裏側に皆さんが議論された重要な部分があるかと思うので、事務局から送られる書類を確認しつつ、委員の方々に伺えればありがたい。

(室田部会長) 審査する中で疑問点が出てくると思うので、事務局に直接質問したり、委員同士で議論しながら審査することは有効な手段だと思うが、その手段としてメールアドレスの共有はいかがか。前年度と引き続き、今回も委員同士で共有してメールで意見交換できるようにしてはいかがか。

(事務局)

メールでの意見交換ができるようにとのことだが、事務局で把握している各委員のメールアドレスを全員で共有するというところでよろしいか。

(全委員)

異議なし。

(田邊委員)

推薦団体に関して関係区局に照会すると思うが、その書類(様式5-2)の項目で、「活動による成果」を「活動による成果や効果」に修正できないか。成果がもつ「成し遂げたもの」の意味だけでなく、もう少し緩やかな意味合いとして「効果」を追記できればよい。難しければ、事務局の記入欄にそのような記載がほしい。

また、推薦団体によって成長度合いが異なると思う。継続年数が大きく異なる活動や、団体ごとに書類の説明やデザインなどに施された工夫の違いがあると思う。まだ発展途上の活動か、それとも成熟している活動なのかがわかるとよい。

(室田部会長)

確かに継続年数だけではわからない活動の良さがあると思う。成果だけでなく、広い範囲に影響力を与えるような、様々な効果に関する情報があるとよい。団体の活動が現在どのようなプロセスの段階にあるのかわかるような記載もあってよい。

(事務局)

関係区局への照会票(様式5-2)については、頂いたご意見をもとにフォーマットを修正するようにする。また、「熱意」に関する質問は様式の中で団体に伺うこともできるし、団体への直接のヒアリングは一次選考を通過した団体に対して二次選考に向けて行う予定なので、その段階で「熱意」を確認していくこともできる。

(室田部会長)

「熱意」も含めて団体に直接伺わないとわからないところもあるかと思うが、それは二次選考に向けたヒアリングの際に効果的に把握できるようにしていくとよい。

#### 【議事4】第11回横浜・人・まち・デザイン賞の応募状況

(事務局)

今回の応募状況に関する説明。

(田邊委員)

今回の応募された団体で区から推薦されたものは多いのか。

(事務局)

区よりも一般市民の方からの推薦が多い傾向が見られた。

(片岡委員)

現在は受賞した団体のみしか名称は公開されないのか。応募されたが受賞しなかったものは公表されないのか。

(事務局)

現時点だと受賞した団体のみしか公開していない。しかし、先ほども意見があったとおり、結果的に表彰されなかった団体も広く広報していきたいと思っている。

(片岡委員)

先方の了解が得られたらではあるが、今回デザイン賞で推薦されたことも周囲に評価されていることを示せるのではないかと。一次選考を通過した団体だけでなく、不通過であってもよい活動であることを紹介するのもよい。

(室田部会長)

昨年度も広報について議論した。通過しなかった団体をどのように広報するか議論したかと思う。その後の対応はいかがか。

(事務局)

受賞しなかった団体の広報は、今後検討していく。

#### 【議題5】その他

(事務局)

今回の募集広報について説明(資料7参照)。支援賞の取扱いを再度検討していく旨を説明。

(室田部会長)

支援賞については以前の部会でも議論した。支援賞の対象について意見交換したが、そのようなことも含めて検討するということか。

(田邊委員)

確かに、コーディネーターだけでなく様々な団体や個人の方に支援いただいて、その方々を含めて1つの活動が成り立っている。そのため、活動団体は支援いただいた団体・個人から「支援賞」を選びきれないこともあった。どのようなやり方が良いかの判断ではないが、見直す必要性は感じた。このように検討することに賛同する。

(室田部会長)

団体の支援者によっては、ほぼボランティアで活動に参加されている方もいるなかで、「支援賞」を受賞することはモチベーションにつながるのか。

(田邊委員)

私はモチベーションの1つにはなると思う。団体に多くの方が関わるなかで、コーディネーターは外部からの支援者として参加するが、自らも評価していただけたと感じて誉にはなると思う。そのため、「支援賞」がなくなった場合、一抹の悲しさは確かにある。

(片岡委員)

「支援賞」の受賞を目指して支援するわけではないが、頑張ったことに対して評価されることはありがたいと思う。団体が作成する支援賞推薦票(様式2)には、「対象とならない個人または団体」は沢山列挙されているが、対象となる団体などがわかりにくい。どこまで支援してもらった団体なのかもわかりにくいかもしれない。

また、支援賞とするかは別として、対象外であっても支援してくれた個人や組織をリストアップして記入してもらうこともよいかもしれない。一緒に受賞したことをお祝いできるようなメンバーがわかるとよい。

(事務局)

活動に関わった方々をできるだけ多く一緒に表彰できたらと思っている。

(室田部会長)

様々な団体に対して、各々ができることで支援しているところが沢山あるかと思う。そのなかで「支援賞」の対象の線引きをすることは難しい。

一方で、「支援賞」は、受賞した方のモチベーションを上げるような効果もあるかと思うので、慎重に検討してほしい。

以上